

『女学世界』における「投書」の研究

A Study of Readers' Correspondence in Magazine "Jyogaku Sekai"

嵯峨景子* Keiko Saga

1. はじめに

本稿は、明治・大正期を通じて発行されていた雑誌『女学世界』を対象とし、従来の同誌に関しての研究では十分に明らかにされていなかった「投書」という要素の重要性、特に「投書」が雑誌のメディア的機能の変容にもたらした効果を考察することを目的とする。

『女学世界』は1901年1月、博文館より創刊された。明治期に創刊された女性雑誌としては長命を保ち、1925年6月に廃刊となるまでおよそ25年という長い歴史を有している。『女学世界』は博文館の雑誌の売り上げの首位を占めていたこともあるほど大部数を発行していた雑誌でもあり、商業的にも成功をおさめている(坪谷1937:146)。

このように明治期の女性雑誌史上、重要な位置を占める雑誌でありながら、『女学世界』は雑誌研究において十分に注目されているとはいえない。従来『女学世界』が女性雑誌として堅

実な評価を受けるのは、明治30年代に登場した良妻賢母主義に基づく啓蒙型婦人雑誌、商業的婦人雑誌の先駆けとしてのみであり、それ以外の文脈で雑誌として高い評価を受けることは少ない。『太陽』や『少年世界』、そして『文芸倶楽部』など同じ博文館出版の雑誌と比較しても言及されることは少なく、また取り上げる場合も主題としてではなく、あくまで素材として用いられていることが多い。

『女学世界』そのものを研究対象とするのではなく、同誌を素材として参照しつつ、当時の社会状況や社会意識の解明を目的とする研究にはたとえば次のようなものがある。加藤節子(1986)や高橋一郎(2005)は『女学世界』に掲載された多様な記事の中でも特に体育を巡る言説に着目し、近代日本における女性の身体イメージの変遷を描き出している。金井景子(1997)は『女学世界』に掲載された読者

* 東京大学大学院学際情報学府博士課程

キーワード：女性雑誌、投書、読者、コミュニケーション、メディア

の投稿小説に描かれているモチーフの分析を通じ、明治30年代における結婚や進学をめぐる女性たちの自画像に対する考察を行っている¹。また川村邦光（1993）は読者欄に掲載された投書を分析し、読者たちがどこにもない階層のどこにも見られない同じことば遣いをすることによって、川村の言うところの「オトメ」の世界を生み出していることを指摘している。これらは『女学世界』を幅広い内容と多数の読者を獲得した雑誌として参照しているものの、それら個々の論考中において『女学世界』という雑誌自体の性質に対する考察は主眼とされおらず、『女学世界』固有の特質への検討が充分になされているとは言い難い。

本稿は明治期を代表する女性雑誌の一つであるこの『女学世界』を主題として取り上げ、同誌の性質に対する検証を行う。従来の雑誌史研究では、『女学世界』を評価するにあたっては、知識人や文学者など、現在も歴史に名を残している人物が同誌上で発表した言説の考察に重きが置かれている。

しかしこれら先行研究がさほど重要視してこなかった社史や発行部数等の史料を再検討すると、誌面の評価が低い時期こそが、実は商業的な成功をおさめている期間であるという、著名人の言説とは位相を異にした『女学世界』の姿が浮かび上がってくる。

この落差を解き明かすためには、思想史的な価値判断から離れ、『女学世界』を当時の読者がいかに読み、いかに捉えていたのかという、受け手側の視点から雑誌を見直す必要がある。そうした視点から誌面を検討すると、投書という行為が重要な意味を持っている事実が浮かび

上がってくる。のちに詳細に検討していくように、懸賞文の募集をはじめ、『女学世界』の誌面に対する投書の位置付けが高まり、そうした状況の中で、読者から多くの支持を集めた投書家が登場し、『女学世界』の売り上げに貢献を果たしていた。このように投書が『女学世界』における重要な機能の一つであることを明らかにし、投書家の登場とその背景、さらにそれを支持した読者双方の動きを具体的に描き出してゆく。

本稿は『女学世界』という雑誌を受け手側から捉え直す、雑誌の受容史に繋がる研究でもある。雑誌の読者のリアルタイムの読書行為の様態を現在の我々に示す史料は極めて限られており、そうした中で読者欄に掲載された投書は、編集部による取捨選択が行われているというバイアスがあるにせよ、当時の受け手の声を反映したものであると考えられる。本稿が読者という言葉で念頭に置いているのは、抽象化された概念としての読者ではなく、『女学世界』という雑誌を手に取り読んでいた身体性を持つ読者の姿であり、そうした読者の声を誌面の中から掘り起こすことを試みたい。この作業を通じ、『女学世界』における投書という重要な機能の存在を指摘し、知識人や著名人らの言説記事の分析からのみでははかれない、『女学世界』のメディア的特質を明らかにする。『女学世界』という事例を通じ、女性雑誌というメディアと読者との関係性を考察するうえで、一つの重要な視座の提示を目指すものである。

なお、本稿で用いる「投書」という語は、懸賞文への応募作品や読者欄掲載向けのものなど

を含む、読者が雑誌掲載を想定して文書を送る行為全般を指している。今日、しばしばこの語から想起されるような作り手への苦情・要望・

質問の手紙といった意味に限定されるものではない。

2. 『女学世界』の歴史と発行部数

2.1 『女学世界』の歴史と編集方針の変遷

本稿の主題となる雑誌『女学世界』は1901年1月、博文館より創刊された。編集主任は松原岩五郎²、毎月1日に発行された月刊誌である。『女学世界』が誕生したのは、1899年に高等女学校令が公布され、女子中等教育が制度化されていった時代であった。女学校の増加は読者人口の増大と活字メディアに対する関心の高まりを生み、多数の雑誌が創刊されるなど、明治期における婦人雑誌ジャーナリズムの転換点となった時期である。

以下本稿では、『女学世界』を時系列に「初期」「中期」「後期」と三期にわけて論述していく。この区分は編集方針や誌面傾向の変化、あるいは編集主任の交代に対応するものである。以下本章では各時期の雑誌史的特徴を概観する。

初期は1901年1月から1907年12月までである。編集主任は松原岩五郎、啓蒙型婦人総合雑誌としての特徴を強く打ち出していた。『女学世界』は発刊の辞に「女子に必要な事柄を網羅し学を進め、智を開くと共に其徳を清淑にし、其情を優美にし、家政に通曉せしめ、女子に必要な芸能を自得せしめ、以て賢母良妻たるに資せむと欲す」とあるように、創刊当初は良妻賢母思想を背景にした、啓蒙型女性総合雑誌として出発している。創刊号の目次は「論

説、講義、伝記、学術、技芸、小説、家庭、雑録、文苑、才媛詩藻」という多様な項目立てのもと、さまざまな記事が掲載されている。執筆陣も跡見花蹊や下田歌子をはじめ、当時を代表する教育者や知識人による論説記事が多く掲載されているところに特徴がある。また毎月1回発行される本誌に加え、年に4回、季刊形式で定期増刊号が発行されていた。

中期は1908年1月から1917年6月までである。編集主任は引き続き松原岩五郎であり、初期において用いられていた項目立ての誌面構成は廃止される。それに伴い論説記事が減少するなど啓蒙色が薄れ、そのかわりに「家庭内実務に関するものや、有名・無名人の体験談・経験によるさまざまな生活上の対処法等が紙面の多くを占めるようになり、「このような誌面の形体は質的低下と内容の平板さを招いた」（吉沢 1986:90）とされている。本稿ではこの中期への再検討が主眼となるが、追って詳説していく。季刊で発行されていた定期増刊号は、1914年には3回、1915年と1916年は年1回と減少し、後期に入ると完全に廃止される。

後期は1917年7月から廃刊となる1925年6月までである³。長年『女学世界』の編集主任を務めた松原岩五郎が博文館を辞め、代わりに岡村千秋がその座に就いた⁴。それとともに大幅な誌面

構成の変更がなされ、文壇作家による長編小説の連載が誌面の中心となる。また長編小説をメインの読物に据える編集方針の変化に加え、雑誌が設定している読者層も以前とは変わっている。雑誌のメインターゲットを女学生とし、以

前より若い層に焦点を絞った紙面作りがなされるようになった。『女学世界』は女学生、さらには女学校を卒業直後の職業婦人など若い女性を対象とした文芸雑誌へと変貌を遂げた。

2.2 『女学世界』の発行部数にみる売り上げ

ここで『女学世界』の発行部数に関する史料を検討してみたい。雑誌史的な観点から手堅い評価を受けているのは啓蒙色の濃い初期であるが、そうした後年からの評価は当時の発行部数と相同性を見せているのであろうか。『女学世界』発行期間すべてを通じた発行部数のデータは残されていないが、一部の史料は残されている。その史料をもとに、発行部数の移り変わりを見ていくことにしよう。

表1は博文館の社史をつづった未刊行史料に記述されている『女学世界』の発行部数の記録である。1902年の次が1908年とデータにやや連続性が欠けているが、創刊時からの『女学世界』の部数の変化がここに示されている。この

データによれば、1910年前後（明治40年代）において、『女学世界』は5万部の部数を発行していたことがわかる。この史料が先行研究において引用されることはこれまでなかったが、これは『女学世界』初期から中期の商業的動向を考えるうえで、貴重なデータである。

従来『女学世界』の発行部数の史料として最も引用されているのが、「当時、博文館から出ていた「女学世界」は発行部数の最も多い雑誌の一つであった。『文学世界』が一万、『文芸倶楽部』が三、四万の時、『女学世界』は七、八万を売って世の驚異とされていた。」（小川1962:69）という証言である。この記述は当時の出版事情を知る業界人の証言として大変貴重

表1 『女学世界』の発行部数

巻数	西暦	発行部数
第1巻第1号	1901年1月	2万2千部
第16号	1901年12月	1万5千部
第2巻第1号	1902年1月	2万8千部
第16号	1902年12月	1万8千5百部
第8巻第1号	1908年1月	5万部
第10巻毎号平均	1910年	約4万6千部
第11巻毎号平均	1911年	約5万部

出典：『博文館五十年史初稿（3）』第7編112頁より引用・改変⁵

表2：関東大震災後（1923年）の各雑誌発行部数減少の予想

誌名	十月分確定部数	震災のため市内及付近減部数	差引部数	改十月分部数	十一月予定
幼年画報	32,000	3,900	28,100	28,000	28,000
幼年雑誌	14,000	2,000	12,000	12,000	12,000
幼年世界	17,000	2,200	14,800	14,500	12,000
譚海	90,000	13,000	77,000	75,000	70,000
文藝倶楽部	41,000	6,700	34,300	34,000	32,000
講談雑誌	77,000	13,500	63,500	60,000	58,000
ポケット	32,000	4,980	27,020	27,000	25,000
少年世界	31,500	4,100	27,400	27,000	26,000
少女世界	50,000	7,000	43,000	43,000	40,000
中学世界	20,000	2,600	17,400	17,000	17,000
女学世界	18,000	2,300	15,700	15,500	13,500
新趣味	7,500	1,300	6,200	6,000	5,500
寸鏡	18,000	2,000	16,000	15,000	12,000
家庭雑誌	18,500	2,000	16,000	15,000	12,000
新青年	15,000	2,000	13,000	13,000	12,500
淑女画報	10,000	1,300	8,700	9,000	7,000
太陽	12,000	1,300	10,700	15,000	10,000
農業世界	11,500	600	10,900	10,500	10,500
野球界	14,000	3,000	11,000	9,000	8,000
計	538,000			435,500	

出典：『博文館五十年史初稿（4）』第10編177-179頁より引用・改変

なものであるが、この部数がどの時期を指しているのかが厳密には不明であり、またあくまでも回想に留まり根拠となる具体的なデータが提示されていない点に留意する必要がある。先に示した5万部という数値は小川による証言とは数万部のずれがあり、7、8万部という数値が少し多く見積もられている可能性と、さらにこの後『女学世界』が発行部数を伸ばした可能性の両者が考えられる。このようにまだ議論の余地はあるものの、「1910年前後において5万部発行していた」ということは、『女学世界』の発行部数として実証できるデータであるといえよう。

表2はかなり時代が下り、1923年における『女学世界』の販売データである。これにより、1923年10月号の出版部数が1万8千部であったことがわかる。参考のために、他の婦人雑誌の出版部数と比較してみることにしよう。1924年において、『主婦の友』が23、4万部、

『婦女界』が21、2万部、『婦人世界』が17、8万部である（社史編纂委員会 1959:609）。こうして見てみると、他の婦人雑誌と比較しても『女学世界』の出版部数は落ち込んでおり、明治期において圧倒的な部数を誇った雑誌の凋落が激しいことがわかる。また『女学世界』ばかりではなく、博文館の雑誌は全体的に出版部数が低迷していることが見て取れる。実業之日本社が従来の買切制をやめて1909年より返品が可能な委託販売制を取り入れ、そのため雑誌の販売部数が飛躍的に伸びたのに対し、博文館は買切制にこだわったため、雑誌のマスプロ化に乗り遅れ、大正期になるとかつての栄光を失っていった（橋本 1964:176）。『女学世界』はこの後間もない1925年6月に廃刊となっている。

このように不連続ではあるものの、引用した史料から『女学世界』各時期の発行部数の目安

がつき、『女学世界』中期にあたる1910年前後において同誌が5万部という、当時としては高いレベルの部数を発行していたことが判明した。

この時期は従来の『女学世界』の評価においては、啓蒙色でもなく文芸色でもない時期と見なされ、「質的低下と内容の平板さを招いた」と述べられていたように、誌面内容に対する評価も高くはない。しかし、本節で見たように、

3. 投書と『女学世界』の隆盛

3.1 初期『女学世界』における投書

前章において『女学世界』中期を再検討することの重要性について触れた。前期の誌面的特徴として、知識人による啓蒙的な論説記事が多く掲載されていたこともすでに述べたが、中期にさしかかるとそのような啓蒙的記事は影を潜める。従来の雑誌史的総括では中期について、そうした啓蒙記事の後退、また後期のような文壇・文芸色もまだあらわれていないということから、この時期を「平板」と捉えてしまうことが多い。しかしこれは、著名人の言説を中心に評価しようとする、後年からのいくぶん偏りのある解釈によるものである。そうした解釈にとって『女学世界』中期とは「家庭内実務」や「生活上の対処法」に関する記事にしか特徴を見出せない、「質的低下」の時期に映るのであろう。

しかし、先に発行部数の表でみたような『女学世界』中期の隆盛は、そうした従来の雑誌史総括では説明できない。出版部数が多く、多数の読者に支持されていたと考えられる時期に関して、「平板」とのみ説明し軽視してしまうことは適当とは言い難い。

啓蒙型婦人総合雑誌として評価を得ている創刊当初に比べ、中期は格段上の発行部数を記録している。であるならば、『女学世界』という雑誌の性質を解明するうえにおいて、この隆盛期の詳細な検討は不可欠であろう。次章において、『女学世界』の中でも高い売り上げ部数を誇った中期について、考察を行っていく。

作り手側が一方向的に提供する言説ばかりをみては気付きにくいだが、『女学世界』中期において誌面をリードするのは、家庭内実務の記事などよりも、読者からの投書というコンテンツである。このコンテンツの発展が雑誌の性質を変容させ、また多数の読者の支持を得る要因となったと考えられる。本章ではその投書が中期誌上において重要度を増大してゆくさまを追い、この投書という形式が『女学世界』のメディアとしての主要的機能にまでなっていくことを示してみたい。

投書という形態そのものは、創刊直後から『女学世界』において存在している。しかし初期と中期を比較すると、誌面における投書の位置付けが異なっている。初期における投書は、主に文芸創作というカテゴリーの範疇において行われていた。例えば『女学世界』初期の本誌の巻末に掲載されていた「才媛詩藻」には読者からの投書が掲載されているが、その内容は和歌や新体詩、韻文や叙情文、短文などというように、あくまで文学の枠組において募集がなさ

れていた。

また、本誌に加えて年4回発行されていた定期増刊号は、読者に懸賞文募集を呼びかけ、その応募作品を中心とした編纂がなされていた。1901年3月に発行された最初の定期増刊号『壺すみれ』は、「小説、国文、消息文、和歌、新体詩」という構成が取られている。以後も定期増刊号は『花あやめ』『糸すすき』といったタイトルで発刊され、読者の応募した文芸創作を中心とした編纂がなされた。しかしこのような定期増刊号は売り上げの不振が続き、1904年3月の『女学校生活』を皮切りに、『世界各国の

3.2 中期『女学世界』における投書の役割上昇

先に記述しておいた時期区分では、中期のはじまりを1908年に定めたが、その1908年より、『女学世界』は啓蒙色の強かったそれまでの編集方針の転換を図る。その背景としては、後発の婦人雑誌『婦人世界』の成功と、その『婦人世界』編集方針の影響が挙げられるだろう。1906年に実業之日本社より創刊された『婦人世界』は、明治における大ベストセラー『食道楽』の著者である村井弦斎を編集顧問に迎え、家庭向けの实用記事を中心とした編集で部数を伸ばし、明治後期の婦人雑誌界をリードしてゆく。そのような時代の流れのなかで、『女学世界』も競合誌『婦人世界』にならい家政に関する实用記事を増やし、対抗を試みたものと思われる。

しかしここで注目したい中期における最も重要な変化は、实用記事の増加ではない。本稿が中期『女学世界』において指摘したいのは、読者による投書の位置付けが上昇し、結果として

家庭』『運命開拓法』など、テーマを決めた特集内容に知識人や著名人が寄稿するスタイルに変更がなされ、読者による懸賞文を中心とした編纂形式は姿を消した。

このように初期『女学世界』における投書は、文芸創作という枠組みの中で募集がなされていた。この段階においては、読者からの投書という形式は、『女学世界』にとって中心的な役割を果たすものではない。雑誌の誌面を主導するのはあくまで知識人や著名人による言説であった。

読者の投書が同誌の中で肝要な役割を果たすことになった点である。読者からの投書が重要な意味を持つ転換点となったのは、1908年11月に発行された定期増刊号『こころの日記』である。この時より、定期増刊号はそれ以前のテーマ的特集に知識人が寄稿する形式に代わり、再び読者の懸賞文を中心とした編集方針へと転換が行われた。またこうした方針のシフトとともに、募集される投書の内容にも大きな変化が生じている。前節でみた初期の投書は文芸創作というカテゴリにおさまるものだったのに対し、中期における投書は日記や随筆など、より自由度の高い表現物が増加してゆく⁶。

中期における変化の嚆矢となった定期増刊号『こころの日記』はタイトルが示す通り日記をテーマとした懸賞文であり、「小姑の書いた嫂の日記」、「教育を受たる女の不遇日記」、「恋を恋する娘の日記」、「田舎住居の処女日記」など、さまざまな立場の女性たちの日記が

掲載されている。こうした方針について、当時編集主任であった松原は後年「名家の教訓や、実際家の経験談以外、うるほひのある雑誌の読物の一として才媛の懸賞文募集を企てた」と説明している（松原 1919：78）。『こころの日記』の懸賞文にかけられている賞金が一等30円、二等20円、三等10円と高額であることも、編集方針における投書の位置付けや読者の応募する文章への期待度が高まっていることを示していると言えよう。読者たちは自己表現のために、もしくは誌面に自らの文章を掲載するという名誉のため、さらには賞金のために、競って投書を行った。この増刊は好評を博したようで、次号の定期増刊号『こころの秘密』（1909年1月）も同様に日記の募集がなされ、以後も定期増刊号は読者からの懸賞文をまとめたものとなっていった。

このような懸賞文の募集は、教育の普及により読み書き能力を向上させた女性たちに自己表現の場を与えることとなった。文学への憧れや自己表現への欲求など、さまざまな野心を抱いた読者たちは、懸賞文への応募を重ねた。そうしたなかで、頻繁に入選を重ね、またその内容や文体が人気を博す、常連投書家が出現してくる。そうした常連投書家の代表の一人に、内藤千代子という人物がいる⁷。

「本誌愛読の皆様方、いつもいつも才筆お振ひ遊ばす内藤千代子様を思はれぬ方がございませうか、心の日記に心の秘密、扱ては驚く手紙に小説松風に、逝く春など、近くは嫁がぬ人、もうもう其他一ツとして千代子様がお筆の示される限り私は読む度毎に体がこうし

びれた様に感じ魂はみんなお作の中へ飛んで仕舞つて何とも彼とも丁度お酒にようた人はみなこんなだらうと思ひ升わ。大阪府下愛読者」（1910年1月）⁸

「滯子様のお仰せの通り、私も内藤千代子の御筆には、ホトホト熱中して居る者です、まだ御年も若くて入らしやるのに、よく、まあね、これが本当の天才とでも申上げるのでせう。（後略）君子」（1909年11月増刊）

「あゝ内藤千代子様、敬愛しておかざる千代子様、いかなれば君はすぐれし才を持ち給ふぞ月毎に進み行く君が玉藻、敬愛の念はいよいよまさりてたへがたい程でございます。（後略）信濃、小百合」（1911年11月）

これらは読者欄に掲載された投書の一例であり、内藤とその作品に対する熱烈な讃美と支持がうかがえる。内藤はこののち、1917年頃まで『女学世界』内を中心として絶大な人気を博す作家となる。

先に引用した投書は、読者からの短信を掲載する、いわゆる読者欄に載ったものである。定期増刊号において懸賞文の募集が行われるようになった後間もなく、1909年4月より読者欄が開設されている。読者からの投書機会のさらなる増加を招くこうした方針は、結果的に雑誌中における投書の存在をさらに大きくしていく。読者欄は雑誌への感想ばかりではなく、読者同士の交流の場としての機能も果たすようになる。「それに此の倶楽部が出来て誌友の方々に親しくお目にかゝる様な気がして、ほんとに

嬉しう御座います。山吹」(1909年10月)、また「愛読者様、私は無教育者ですが、女学世界を唯一の友として居るのです。倶楽部が出来てから面白みがよほどまして来て、雑誌が来ると倶楽部を第一番に拝見するのです。(後略)福井県里人」(1910年3月)などという投書が示すように、読者欄は読者同士の仲間意識を深める場となり、雑誌に対する連帯意識の形成を促していた。このように、読者欄内において作品の感想を伝え合ったり、また読者同士でコミュニケーションをする傾向は、常連投書家を読者が集散的に支持する土壌ともなっていた。

読者からの投書は、次第に単なるコンテンツ

3.3 雑誌内スターとしての投書家の活動とその受容

前節でみたような状況の中、頻繁に懸賞に入選し、投書という雑誌内コミュニケーションの中でも、際立った存在になる常連投書家が登場する。その代表的な存在として、内藤千代子の名を先に紹介した。内藤は定期増刊号『こころの日記』に「田舎住居の処女日記」で三等入選を果たし、以後も頻繁に入選を繰り返し、頭角を表わした。内藤の作品は好評を博し、やがて定期増刊号に留まらず、本誌にも多数作品が掲載されるようになっていく。

「私等のクラスには、大分内藤千代子様崇拜者がありますよ、もしお作がないと、皆落胆いたします、何卒毎月御願ひします。櫻子」(1913年4月)

この投書が示すように、内藤は読者からの熱い支持を集め、『女学世界』の呼び物ともいえ

の一部という存在に留まらなくなってくる。懸賞文等の拡大もさることながら、懸賞文など読者の手による作品への反応を直接的に共有する読者欄があらわれたことにより、投書の重要性は、『女学世界』の中で目に見えて強大なものになっていく。

次節では、投書から派生したコミュニケーションの代表的な一例として、投書から生まれた常連投書家というスター的存在と、彼女たちにまつわる雑誌内でのコミュニケーションの盛り上がりについて、さらに詳しく検討してみよう。

る存在になってゆく。

こうした傾向は、作り手にとっても無視できるものではなかった。

「後に寄書家として内藤千代子といふ才媛の書けるものが、毎号読者を熱狂せしめて」(『博文館五十年史初稿(2)』第4編明治34年の項：158-159)

「其文(引用者注：内藤千代子の文章のこと)は毎編若き女性間に盛んに愛読せられ、為に「女学世界」の発行部数を本館各雑誌の中の首位に上らしめしことあり」(『博文館五十年史初稿(3)』第7編明治45年の項：191)

このように雑誌の作り手側にも内藤の存在の大きさは認識され、雑誌隆盛の駆動因としてみ

なされている。

内藤以外で人気を博していた常連投書家としては、花散里（本名上原綾子）、松平鏡子（本名北川千代）、紅梅、野菊、玉露などの人物が挙げられる。個々の人物に対する詳述を行う余裕は本稿にはないが、後年児童文学作家となった北川千代以外は、現在においては無名の存在である。しかし当時の読者にとって彼女たちはスターであり、作品に留まらず本人にまで興味の関心が及ぶなど、読者の話題を集める存在であった。

「私は野菊様、綾子様、千代子様を本誌文壇の三福対だと存じます、千代子様を爛漫たる桜に例ふれば野菊様は霜におちず色にはほこる白菊の花、雲に香りをはなつて気高く咲いていらしつやるのが綾子様。鹿児島、つや子」(1910年12月)と投書家の作風を比べることも盛んに行われる。また最良の投書家の作品が掲載されない「玉露様、野菊様のお作が見えませんので、ほんとに物たりない心地いたします。中渋谷、杜若花」(1914年8月)という投書が寄せられることもしばしば見られた。常連投書家に対して読者欄内の投書が言及し合い、常連投書家を媒体として、読者の雑誌内コミュニケーションが派生した。

「内藤様のもよいでせうが、私は野菊様と玉露様が大好きですよ、丁度蕉園様の絵を見てゐるやうな気持ちがあります、前号世渡り上手の中の世渡りを綱渡りになぞらへ遊ばした野菊様の御考へや御頭の輝くは尊き御心の反映云々の玉露様の御言回随分振つてみますのね、いつもながら実に面白い拝しました。

本郷、弥生」(1910年7月)

読者欄という場を用いて常連投書家について語り合うコミュニケーションは、誌上に投書主導の世界を形成してゆく。互いの投書による発言を受けて更なる反応が重なってゆき、「想像の共同体」は膨らみを見せるのである。同時期、論説記事、実用記事への単発的な感想などではそのような盛り上がりは見られない。「共感」し合える装置が、スター投書家への言及にはあったのだ。

「大阪府下愛読者様、私も御同感で御座いますのよ、なんだか内藤様が懐かしくて懐かしくて仕方ありませんのよ、千代子様のお話の出ていない時はなんとなく物たりない感じが致しますわ。(後略)大阪、野末の花」(1910年2月)

「女学世界最愛読者様、妾も貴女と同感でございますわ。内藤千代子様のいつに変わらぬ御才筆一月号のうれしい正月日記は如何でございます、もうもう振るいつきたい程ですわ、妾何べん読んでみたか知れませんでしたの。(後略)愛媛、白露」(1910年2月)

読者欄に掲載された投書に見られる特徴的な文体もまた、この時期の注目すべき点である。この文体を「オトメ体」と呼ぶ川村(1993)の論考にもあらわれるように、こうした文体の共有もまた誌上コミュニケーションの発展の一助となっていたらう。

一般読者間のこのようなコミュニケーション

が拡大してゆくための重要な鍵となったのは内藤ら『女学世界』内のスターであるが、そうした常連投書家ももちろん「投書」という形式を駆使する者たちである。常連投書家というスターと、それを媒介にする一般読者。いずれも「投書」という形式を用いて雑誌に地殻変動をもたらしているのである。

本章における分析を再度整理しておこう。中期『女学世界』の雑誌の方向付けを主導するのは、著名人の啓蒙的な言説ではない。作り手や知識人の思想を読者に付与するような、当初目論まれていた雑誌の機能が周縁化し、読者の投書と、その投書から派生するコミュニケーションが『女学世界』の実質上の中心的機能となっているのである。

「うるほひのある雑誌の読物の一として才媛の懸賞文募集を企てた」という意図の下はじめられた懸賞文は、結果的に雑誌の作り手の予想を大きく越えて、『女学世界』の基本的性質

を変容させてしまうほど、投書の膨張を招来した。そして投書が派生させたコミュニケーションや世界観の形成が、『女学世界』という雑誌の隆盛期を築いたのである。この現象こそが、従来の視点では見逃されていた、『女学世界』中期における重要な特徴である。

自由度の高い発言が許された当時の読者欄において、読者は内藤を中心とした常連投書家やその作品を主題にしてコミュニケーションを繰り返す。一方、編集部が中期のはじめにおいて企図した実用的記事や、知識人の論説記事に対しては、投書家に対してのような強い反応は見られず、雑誌の実質的な中心はやはり投書から派生したコミュニケーションとなっている。

こうした常連投書家をめぐる状況に象徴されるように、投書という形式は、さまざまなコンテンツやコミュニケーションを派生させ、雑誌の根幹を形作っていった。

4. 中期『女学世界』における投書の本質化

『女学世界』において投書が重要な機能を果たしていた時期は、近代日本において女性と自己表現をめぐる状況の転換期と重なっている。1905年、女性のみを対象とした投書雑誌『女子文壇』が創刊されている。詩人の河井醉茗の編集のもと、『女子文壇』は水野仙子や山田邦子など、投書出身の作家を多数輩出した。また1911年に創刊された『青鞥』は初めて女性の手によって作られた雑誌であり、創刊当初は文芸雑誌としての性格が強かった同誌はやがて、「新しい女」を巡る言説と活動の中心の場と

なっていった。

このように、女性の自己表現が盛んになっていた時代状況のなかで、『女学世界』は賞金付きの懸賞文の募集をはじめ、読者欄の開設など、投書を積極的に取り入れた誌面作りを行った。そのなかで内藤千代子をはじめ、常連投書家として活躍する書き手が懸賞文を通じて発掘され、投書という形式が生む状況をリードしていくことにもなる。またそうした投書家の作品が読者欄など『女学世界』内の他の投書機会において度々言及されることなどにより、そこか

らまた投書者主導の世界観が発達、膨張してゆく。こうした状況の拡大は、本来上述の文脈において想定されうる女性の自立や主張を念頭におくような「女性の自己表現」からは逸脱したものであるだろう。しかしともかくも、投書という形式が派生させたこのような世界観やコミュニケーションは、単なる主要コンテンツという次元を越え、雑誌のメディアとしての本質的機能にまでなっていた。

明治30年代において良妻賢母主義のもとに創刊された『女学世界』は、初期においては啓蒙型の総合婦人雑誌であり、誌面の中核をなしていたのは知識人の言説であった。それが中期において新たな展望をみせ、投書をもたらす読者の雑誌への介入機会、それに誌上での読者間コミュニケーションが雑誌の中心的機能となってゆく。確認すればこのとき重要なのは、そうした投書という形式が実現させた種々の発展が、単なる人気コンテンツの生成に留まらず、雑誌の根本的性質まで変容してしまうことである。

大正期の雑誌における投書という情報形式について北田暁大は、「婦人雑誌（あるいは少女雑誌）においては特権的な位置づけを与えられていた」と指摘している（北田 2000:139）。し

かしここでは北田は本稿が注目したような、投書という形式が雑誌の全体的な機能に及ぼす影響にまでは言及していない。また、北田が想定する投書とは生活感を帯びた意味での「私的」な事柄の告白であり、そうした投書が「私的なことにかかわる〈わたし〉たちの《私的な公共圏》の存立を信憑させる」という点に注目がなされている。本稿が提示した『女学世界』における投書の展開は、そのような実生活に密着した事柄に留まるものではなく、むしろ生活感から遊離した広がりを見せるものである。広い振幅を有した『女学世界』中期の投書は、私事も文芸創作もファンレターも併せ吞みつつ展開し、常連投書家の存在を中心に、その方向性は実生活的なものに狭く限定されはしなかった。

文芸創作や読者欄といった複合的な投書の機能が雑誌自体の本質となっていた『女学世界』中期の例は、この時期の雑誌と投書の機能を考察する上で強く注目されてよい。『女学世界』中期と同時期に『女子文壇』など、投書をメインコンテンツとする雑誌があらわれているという文脈を考え合わせたとき、たとえば明治後期から大正期における女性の自己表現という観点からも重要な知見たりうるためである。

5. まとめと今後の課題

本稿は女性雑誌史的に見ても重要な位置を占めると考えられる『女学世界』について、同誌がその中期において従来の雑誌史的評価では拾い上げられないかたちでの隆盛をみせていたことを明らかにした。このとき読者から支持を集め、雑誌のメインコンテンツとして機能してい

たのは、懸賞文出身の投書家の作品であった。またその作品の世界観を読者が共有する際、読者欄等の投書という形式が役割を果たしており、そうしたコミュニケーションの膨張は、『女学世界』の雑誌としての性質を根本的に変えてしまっていた。実質上、雑誌としてのメ

ディア的機能の中核は知識人や作家の手により提供される読み物ではなく、懸賞文や読者欄等、読者からの投書という形式が担っていたのである。

投書という形式が本質的機能を担っていた『女学世界』であるが、後期に入るとその性質に明らかな変化が生じる。後期には文壇作家の連載長編小説が誌面の主軸となり、読者からの投書の占める割合や位置付けが著しく低下するのである。定期増刊号も廃止され、高額の賞金つきの懸賞文の募集はなされなくなる。全体として投書は文字数の少ない、内容の限定されたコンテンツへと縮小してゆく。後期において誌面の中心となるのはプロの書き手である作家であり、以前のような常連投書家と投書を中心としたコミュニケーションは誌面から排除されて

ゆくのである。そこには、投書から派生、発展した世界観やメディア的機能の膨張に対し、本来送り手であった編集側が自らの主張、意向をいかに介入させていくかという葛藤が見られる。そのプロセスについての考察ははまだ詳述されない今後の課題であるが、本稿の紙幅では詳述する余裕がないため、別稿にて検討したい。しかし少なくとも、知識人による啓蒙や文壇色の強調といった編集側の主張や方針が不明確であることが、必ずしも雑誌の平板さを意味しないということは本稿で示されたであろう。

上述した『女学世界』中期から後期への推移を含め、投書という形態の発生や衰微のプロセスについての更なる考察、また明治後期から大正期における女性の自己表現という論点への発展も今後の視野に入れてゆかねばならない。

註

- 1 金井（1997）が行った投稿小説の分析は、本稿の時代区分における「初期」に当たる時期を対象としている。また本稿は投書されたテキストの内容分析ではなく、『女学世界』という雑誌における投書の機能を論じることを目指している点において、金井と立場を異にしている。
- 2 松原岩五郎（1866-1935）は明治期において東京の下層社会を描いたポルターージュ『最暗黒の東京』で現在も名を残す作家、記録文学者である。創刊から1917年6月まで『女学世界』の編集主任を務めた。
- 3 雑誌の奥付に記されている名前を見ると、7月までが松原岩五郎、8月から岡村千秋になっている。しかし7月から目次がリニューアルし内容も一新していること、さらに博文館社史には「六月一日に至り、多数主要記者の更送を行つた」（坪谷 1937:258）と記されており、この時松原も職を解かれていたので、本稿においては7月より編集人が岡村千秋に代わったとみなしている。本誌の奥付の修正が一ヶ月遅れた可能性が高いのではないだろうか。
- 4 岡村千秋（1884-1941）は柳田民俗学のよき理解者であり、日本民俗学の発展を影で支えた人物である。松原の後を引き継ぎ1917年7月から廃刊まで『女学世界』の編集主任を務めた。
- 5 『博文館五十年史初稿』は博文館の社史『博文館五十年史』の草稿であり、未刊行。そのためページ番号に重複等がみられる。この草稿には社史として活字化されなかった編集動向や出版データが記されている。三康図書館所蔵。
- 6 中期における定期増刊号に対して小山（2005）は「人生訓に焦点を合わせたタイトルが並ぶようになり、社会性が希薄化していった。」と述べている（小山 2005:8）。これは知識人の言説に高い価値を置く視座からの評価づけと言えよう。
- 7 内藤千代子（1893-1925）は『女学世界』における投書で頭角を表わし、それを足がかりに流行作家となり、一世を風靡した人物である。しかし現在では文学史に名を留めなればかりではなく、ベストセラーとなった著作も現存するものが少ないなど、内藤の名前は完全に忘れ去られている。内藤については森山（1993）や嵯峨（2008）を参照のこと。
- 8 以下出典を表記せず引用する投書はすべて『女学世界』読者欄に掲載されたものである。引用に当たって旧漢字を概ね現代の常用

漢字に改め、また歴史的仮名遣いはそのまま残した。おどり字は文字の繰り返しで代用している。読みやすくするために、一部句読点を補っているものがある。

参考文献

- 橋本求（1964）『日本出版販売史』講談社
- 実業之日本社社史編纂委員会（1997）『実業之日本社百年史』実業之日本社
- 金井景子（1997）「自画像のレッスン —『女学世界』の投稿記事を中心に」小森陽一・紅野謙介・高橋修ほか『メディア・表象・イデオロギー 明治三十年代の文化研究』
- 加藤節子（1986）「雑誌『女学世界』にみる女子体育」『上智大学体育』20号
- 川村邦光（1993）『オトメの祈り —近代女性イメージの誕生—』紀伊國屋書店
- 北田暁大（2000）『広告の誕生 近代メディア文化の歴史社会学』岩波書店
- 小山静子（2005）『女学世界〔明治期復刻版〕解題』柏書房
- 松原岫雲（岩五郎）「磯千鳥氏の事ども」『女学世界』1919年3月78-82
- 森山敬子（1993）「女学世界に咲いた花 —内藤千代子について—」『史の会研究誌』2号
- 小川菊松（1962）『日本出版界のあゆみ』誠文堂新光社
- 嵯峨景子（2008）「内藤千代子と鶴沼」『鶴沼』96号
- 社史編纂委員会（1959）『講談社の歩んだ五十年（明治・大正編）』講談社
- 高橋一郎（2005）「女性の身体イメージの近代化 —大正期のブルマー普及—」高橋一郎ほか『ブルマーの社会史 女子体育へのまなざし』青弓社
- 坪谷善四郎（1937）『博文館五十年史』博文館
- （未刊行）『博文館五十年史初稿 全4巻』三康図書館所蔵
- 吉沢千恵子（1986）「『女学世界』」中島邦監修『復刻日本の婦人雑誌解説』大空社89-92

嵯峨 景子（さが けいこ）

1979年12月7日生まれ

[専攻領域] 歴史社会学、メディア論、女性雑誌研究、女性作家研究

[著書・論文]

「内藤千代子と鶴沼」『鶴沼』96号. 2008

[所属] 東京大学大学院 学際情報学府 博士課程

[所属学会] 日本マス・コミュニケーション学会、関東社会学会、日本文学協会

A Study of Readers' Correspondence in Magazine "Jyogaku Sekai"

Keiko Saga

This article is a study of "Jyogaku Sekai", a women's magazine published through Meiji and Taisyo era. The aim of this study is to clarify the function of the readers' correspondence, and how the correspondence changed the characteristic of this magazine as a medium.

"Jyogaku Sekai" was published for about 25 years, and this is a long period for a magazine published in Meiji. Despite the commercial success, there are not so much studies that has examined the value of this magazine.

In the past studies, the importance of "Jyogaku Sekai" has been evaluated only as a pioneer of enlightenment magazine for women published in 1900's. Those studies have focused only on intellect and famous person's remark. This article focuses mainly on readers' correspondence to analyze the golden age of "Jyogaku Sekai".

The period when "Jyogaku Sekai" was an enlightenment magazine was limited in the early years. And the sales of this magazine increased after the enlightenment color weakened. Despite the increasing sales, "Jyogaku Sekai" in this age is not paid much attention and is regarded as less important by the past studies.

However, the most important characteristic of this period is the development of readers' correspondence. In the early times, the readers' correspondence in "Jyogaku Sekai" was limited to short novels for prize contests. The opportunities for writing to "Jyogaku Sekai" gradually increased and the contents in the correspondence became diversified. The importance of the readers' correspondence was getting higher in "Jyogaku Sekai". Some amateur writers got famous and popular on the readers, and fans on the writers communicated each other lively in the readers' column. In the golden age of "Jyogaku Sekai", the readers' correspondence which developed its contents and form, practically played the main part role in whole "Jyogaku Sekai".

Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, The University of Tokyo

Key Words : Women's magazine, Correspondence, Reader, Communication, Media.

It is essential that the readers' correspondence is not just a popular content in "Jyogaku Sekai". The readers' correspondence and the communication derived from the correspondence played the main function for "Jyogaku Sekai" as a medium.

At first, the main function of "Jyogaku Sekai" as a medium was to enlighten women by highbrow people. So it was not intended that the readers' correspondence got vigor and played the main function. The golden age of "Jyogaku Sekai" was also a turning point of the fundamental character of the magazine, led by the development of the readers' correspondence.